

ユネスコ無形文化遺産登録
国指定重要無形民俗文化財

早池峰神楽

神楽鑑賞ガイド

早池峰山と信仰

北上高地の最高峰・早池峰山（一、九一七㊦）は、東に剣ヶ峰、西に中岳、鶏頭山、毛無森を連ねた東西十数キロにも及ぶ雄大な山容で、標高一、三〇《以上には、かんらん岩や蛇紋岩で形成されたゴツゴツとした巨岩・奇岩が顔を出しています。

この岩石群の狭間にはハヤチネウスユキノソウをはじめとする二〇〇種もの高山植物が咲き乱れ、深田久弥の「日本百名山」の一つにも数えられています。詩人で童話作家の宮沢賢治は、早池峰山の圧倒的な存在感や可憐な高山植物に魅せられて、多くの詩や童話を残しています。

その早池峰山の南に対峙する薬師岳は、花崗岩の山体で、独特の森林植物群落を形成し、早池峰山との植

生の違いが明瞭であることなどから「早池峰山及び薬師岳の高山帯・森林植物群落」として、国の特別天然記念物に指定され、周辺一帯は国定公園となつて保護されています。

また、早池峰山は、古名を「東根嶽（東峰岳）」といい、古代から山岳信仰の霊場として、人々の信仰を集める御山でした。大迫地方の伝説では、大同二年（八〇七）田中の兵部という者が、額に金の星のある白鹿を追つて山頂にたどり着いたことにより開山されたといわれています。

藩政時代には、盛岡藩の鎮山として重きをなし、山麓に早池峰大権現を祀る岳妙泉寺が整備されましたが、明治初年の神仏分離令により、早池峰神社だけが残されたのです。

◆早池峰神楽とは

早池峰神楽は、岩手県花巻市大迫町内川目地区に伝承されている神楽で、早池峰神社の奉納神楽・岳神楽と、大償神社の奉納神楽・大償神楽の二つの神楽座の総称です。早池峰山を霊場とする修験山伏たちによつて代々舞い継がれてきたと言われ、祈祷の型などを神楽の中に取り入れていることから「山伏神楽」とも呼ばれています。

両神楽の始まりは定かではありませんが、早池峰神社には文禄四年（一五九五）銘の権現様（獅子頭）があり、大償神社の別当家には、長享二年（一四八八）の神楽伝授書の写しが残っているため、少なくとも五〇〇年以上前には伝えられていたと思われます。

舞の中に、「能」大成以前の古い民間芸能の要素を残していることから、中世芸能の香りを伝える希有な神楽として、昭和五十一年五月四日に国の重要無形民俗文化財に指定され、平成二十一年九月三〇日にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。

一般的に岳神楽は五拍子を基調とし、テンポが速く「勇壮」、大償神楽は七拍子を基調とし、テンポがゆるやかに「優雅」と評されます。また、両神楽は表裏一体をなしているとも言われ、大償神楽の山の神面が口を開けた「阿（あ）形」であるのに対し、岳神楽は口を閉じた「吽（うん）形」であることにも表われています。

昭和初期までは、農閑期になると権現様と呼ばれる獅子頭を奉持し、稗貫・和賀地方を廻村巡業していました。「通り神楽」とか「廻り神楽」とか呼ばれたこの巡業形態も戦後には途絶え、現在では神社の祭礼や、年祝・新築祝いなどに招かれたり、県内外のイベントで公演することが多くなりました。

早池峰神楽の弟子神楽は、岩手県中央部に広く分布しており、北は盛岡市から南は一関市まで、その数は約一〇〇団体にのぼると言われています。

◆神楽舞台

神楽は、本来は神社の祭礼などで奉納されるもので、境内にある神楽殿で舞われるのが一般的です。舞台の広さは二間（三六〇㊦）四方で、そこに注連縄を張つて神座とします。早池峰神楽が廻村巡業を行っていた時には、「神楽宿」と呼ばれる民家で演じる場合が多く、土間に面した板敷きの部屋（主に茶の間）に注連縄を巡らして舞台としました。この時には、袴座敷や座敷が楽屋となり、楽屋と舞台の境には神楽幕を張つて区別をしました。

神楽幕は、幅二間・高さ一間が基準となっていました。最近ではステージ等での出演が多くなり、舞台映えがする少し広めの二間半の幕を使うため、舞台も二間半四方に作られることが多くなりました。

神楽幕の下地は黒か濃紺が基本で、岳神楽では、中央に「早池峰神社」の名と左右に向鶴紋、大償神楽では、中央に「大償神社」の名と左に菊紋、右に桐紋を染めています。

◆楽人と舞人

舞台では、神楽幕に正対するように太鼓打ちと、両側に手平鉦という鉦打ちが一人ずつ座ります。太鼓を打つ人を胴取(胴前)と呼び、舞手をリードするだけではなく、舞の最中に神歌を歌ったり、時には狂言の間答相手となるなど中心的な役割をします。笛と舎文(言い立て)の人は、神楽幕の裏にいて観客からは見えません。

舞手は、楽屋から神楽幕を上げて登場し、また舞い終わると幕を上げて楽屋に戻ります。全国的には幕の横(袖)から登場する神楽が多い中で、かなり珍しい形式と言えます。多い時には六七人登場することもあります。

◆装束と道具

〔兜〕 舞手が頭につける兜にはいくつかの種類があります。代表的なのが鳥兜です。鳥兜は兜の頂きに雌雄の「鶏」の姿をした飾りをつけることに由来します。この兜には両側に大きな「しころ板(羽)」が付いており、「鯉の

滝登り」「波に千鳥」「鶴亀に松」などのお目出度い模様が描かれています。兜には翁兜・烏帽子・侍烏帽子などもあります。鳥兜にはしころ板は付きません。兜を被らない時には、女舞では頭巾、かんざし(雲上の日輪を表す鉢巻)、荒舞では鉢巻、ザイ(黒や茶、白などの馬の毛を使ったカツラ)などをつけます。

〔御面〕 早池峰神楽では、面を付けて舞う演目と、面を付けないで舞う演目とがあります。面を付ける舞では、その面に神が宿っていますので、舞手は神の化身となって祈祷や託宣を行います。これを「ネリ」と呼んでいます。神舞などでは舞の後半になると、舞手は面を外し美しく速い舞を舞います。これを「クズシ」といい、舞手が人間に戻って神様に捧げる喜びの舞であると言われています。なお、演目によっては舞手が最後まで面を外さずに舞うものもあります。

三番叟や山の神・猿田彦など特徴のある面以外は、主に男神・女神・荒神・翁・殿方・貴方(女方)・道化・動物面などに分けられ、兼用で使う場合が多くなります。

〔衣装〕 基本的に男神は千早・肌っこ(肌着)・袴姿で、女神では千早・着物などを身に付けます。荒舞ではふごみ(野袴)・襷・はばき・腕さしなど激しい動きができる衣装になります。また、神楽衣装には「脱ぎ垂れ」という特殊な着方があります。脱ぎ垂れは、肌っこの上に重ね着した袴を脱いで、腰から垂らした衣装です。太鼓・手平



鉦などの楽人は、白い着物に袴姿になります。

〔採物〕 神楽では、いろいろな道具を身につけたり、持ったりして登場します。これを採物といいます。必ずといっていいほど使われる採物は、扇・鈴木(木棒の先に麻糸の房と鈴がついたもの)・太刀の三つです。そのほかには、剣(大剣・小剣)・弓矢・幣束・木槌などがあり、狂言では金精・ひょうたん・杖などを小道具として使うことがあります。潮汐の舞では、太刀に赤いしごき(帯)を巻いて担ぎ棒とし、その紐の両端に烏帽子を吊り下げて、水桶に見立てるといった見事な道具活用を見せます。

また、舞手の多くは、両中指に紙紐で結んだ「クジ」と呼ばれるものを身につけています。クジは「九字」とも書き、クジを付ける神様は祈祷ができる神様で、できない神様はクジは付けないとか、クジを付けない人は舞殿内に入ることはできないなどと言われています。昔は太鼓や手平鉦の人も付けていたといわれています。

◆演目と構成

両神楽の演目は、呼称の違いはあってもほぼ同じで、裏舞を入れると四〇番以上を伝えています。これらは、「式舞」「神舞」「女舞」「荒舞」「番楽舞」「狂言」「権現舞」などに分けられます。

神楽を正式に舞う場合は、まず最初に「打ち鳴らし」と

式舞

鳥舞・鶏舞(とりまい)

鳥舞は、素面・着物姿の二人の舞手が、扇や鈴木を持って舞います。夫婦和合、子孫繁栄の舞とか、伊弉諾命・伊弉冉命の二神の舞と言われていますが、鶏は昔から悪霊を払う鳥と信じられているため、舞台の不浄を浄める舞であると考えられます。岳神楽では雌鶏の鳥兜をつけた者が、大償では雄鶏の者が最初に登場します。短い舞ですが、複雑で細かく、緩急の妙がある美しい舞です。



いう神降ろしの儀式をします。その後、必ず式舞という六番(式六番)を舞うことになっています。「幕引かず」といって、昼夜にわたって同じ場所で神楽を演ずる場合には、夜には式舞の裏舞(裏式舞)を舞います。演目は、短いもので十五分ほどで、長いものになると四〇分以上になる演目もあります。この式舞が終わると、神舞・女舞・荒舞・番楽舞などの演目の中から数番選んで舞い、ときには狂言を入れます。そして、神楽の最後は必ず権現舞で締めくくることが決まっています。

〔式舞〕式舞は、神楽を奉ずるとき最初に舞う六番のことです。浄め・招魂・鎮魂・予祝・託宣などを内容としていて、「鳥舞」「翁舞」「三番叟」「八幡舞」「山の神」「岩戸開」の順に舞われます。式舞には表舞と裏舞があり、式舞の裏舞は、「四人鳥舞」「松迎」「裏三番」「裏八幡舞」「小山の神」「岩戸開本式」を言いますが、岳神楽では鳥舞の裏舞、大償神楽では岩戸開の裏舞として「稲田姫」という演目を舞うことがあります。

〔神舞〕『古事記』や『日本書紀』などに題材をとった神話の舞で、舞手は必ず面をつけて登場します。舞の前半は舞手が神の化身となって祈禱や託宣を行い、途中で一旦舞が止まり、「舎文」という言い立てで物語の内容が語られます。後半は舞手が面を外し、華やかなクズシ舞を舞う二段構成となっています。

翁舞(おきなまい)

白面の翁が舞いますが、岳神楽では天児屋根命、大償神楽では天常立命と言っています。舞が難しく、テンポがゆるやかであることから、現在では舞われる機会が少なくなっています。延命長寿を祈る舞であり、天の岩戸の前で天照大神をお慰めするために舞った最高の神舞であるとも言われています。翁舞の古い舎文には、仏教に関連した言葉も入っていましたが、神仏分離令以後は消えてしまいました。



〔女舞〕女性(女神)が主役となっている演目です。物語的な要素もあり、優雅で美しい舞曲ですが、これらの中には中世の白拍子の舞振りを残しているものがあるとされます。神舞のように面を外してのクズシ舞はありません。

〔荒舞〕その名のとおり非常に荒々しい舞で、動きが速く、体のさばきの激しいことが特徴です。その由来や内容については神歌や詞章が伝わっていないため、はっきりとしたことは分かっていません。観客には人気のある演目です。

〔番楽舞〕番楽舞は、「侍もの」「武士舞」とも呼ばれるように、武士の戦いや仇討ちなどを題材としたテンポのよい演目です。歌舞伎や能でもおなじみであるため、筋書きをご存じの方が多いと思います。

〔狂言〕神楽の狂言は、演者と胴取(太鼓打ち)との問答で進行するもので、台詞は決まっていますが、その場の機転を利かせることも大事で、面白おかしく、時に艶っぽいストーリーが展開します。別名「道化っこ」(ドケッコ)とも言います。

〔権現舞〕神楽の最後には必ず権現舞を舞います。権現とは神仏が仮の姿としてこの世に現れることをいい、神楽では獅子頭(権現様)にその神仏が遷っています。そのため、権現舞は、この世のあらゆる災いを祓い、人々の安泰を祈禱するもので、特に重要な舞として取り扱われています。



山の神とは、大山祇命おほやまのみのことのことで、春は里に降って農業の神となり、秋には山へ帰って山の神様になると言われていきます。そのため、農業や山仕事をする人たち、山伏神楽を舞う人たちにとっても、最も大事な演目となっています。舞手は六三の九字を切り、不動心印を結んで厄を祓はらい鎮しずめます。大償神楽では、山の神面は口を開けた「阿あ」形、岳神楽では口を閉じた「吽うん」形の面を用います。

山の神舞(やまのかみまい)



三番叟は、式舞の三番目に舞われる演目で、蛭子命ひここのことが世の喜怒哀楽、艱難辛苦かんなんしんくの様を舞ったものと言われていきます。二番目に舞う「翁舞」の擬きもどきとなり、おり、黒面の翁が軽やかに登場します。舎文では、翁舞の翁に対するほめ言葉があり、自分のことは卑下ひげし、こっけいに名乗りをあげます。ゆるやかに舞う翁舞に比べて、三番叟はテンポが速く、曲芸的な動きをするために、観客には人気の高い演目です。

三番叟(おんばそう)



おなじみの神話「天の岩戸」を題材としています。天照大神あまてらすおほみことは、弟の素戔嗚命すさのおほみことの乱暴狼藉らんぼうろうしやくに怒り、天の岩戸にお籠かこもりになりました。天地が暗闇の世界となり、困った神々は相談し、岩戸の前に供物を並べ、天児屋根命あめのこねのみのことが祝詞を奏し、天鈿女命あめのつむぎのみのことが岩戸の前で舞いました。不審に思った天照大神が岩戸を少し開けると、控えていた手力男命たぢからのおのみのことが岩戸を引いて、天照大神をお迎えしたというお話です。

岩戸開(いわとびらき)



八幡大神やっぴんたいていじんの由来を尋ね、弓矢の神徳をたたえ、四方へ矢を射て悪魔払いをする祈禱の舞とされています。素面の二人の舞手が、左手に弓を持ち、腰に二本の矢を差して登場します。舞手の二神は、品陀和氣命ほんたわきのみこと(応神天皇)と、その兄の品夜和氣命ほんよわきのみことであるとされています。この舞も鳥舞と同じく、二人の舞手が面をつけずに舞う数少ない演目の一つです。

八幡舞(はちまんまい)

裏式舞

四人鳥舞(よにとりまい)

鳥舞の裏舞となっており、素面・着物姿の四人の舞手が登場して演じます。この四神は伊弉諾命・伊弉冉命の二神と、その御子である素戔嗚命、そして后である稲田姫命(櫛名田比売命)と言われています。夫婦相合、子孫繁栄、家内安全の舞です。岳神楽では、「稲田姫」の舞を「鳥舞」の裏舞とすることがあります。

松迎(まつむかえ)

大年命の御子に、大香山戸臣命と御年命の兄弟がいました。兄の命は千秋、弟の命は萬歳といい、二神は新玉の年を迎えるにあたり、父神の大年命、母神の香用比売命をお迎えし、門には松竹を飾り立て、内には数々のお供物を供え、祝い納めたというものです。大年命は「歳神」ともいい、毎年正月に各家にやってくる来訪神であるため、正月の舞初めなどにも舞います。

裏三番(うらさんば)・真似三番(まねさんば)

三番叟の裏舞で、三番叟と道化役の二人が登場します。蛭子命と淡嶋命の二神と言われていますが、定かではありません。道化役は、烏帽子を逆にかぶり、道化面をつけて三番叟の振りを見よう見まねで演じ、三番叟が反り返ると、道化役は前屈みとなり、片足で立ち上がりうとして転んだり、時に観客をからかったして、不器用な舞に終了しますが、実は上手な舞手だったりします。

稲田姫(いなだひめ)・大蛇退治(おろちたいじ)

岳神楽では鳥舞の裏舞として、大償神楽では岩戸開の裏舞として舞われることがある演目です。数々の乱暴狼藉をはたらき、高天原を追放された素戔嗚命は、出雲の国、斐の川の上流に降ります。そこでは足名槌命・手名槌命の夫婦が、八岐大蛇に食べられることになった娘の稲田姫命を囲んで歎き悲しんでいたのです。この舞は、素戔嗚命が八岐大蛇を退治するまでの様子を舞い納めたものです。



裏八幡(うらはちまん)・白鬚弓(じほめ)・四弓舞(よゆみのまい)

表舞の八幡舞は二神の舞ですが、裏舞になると四神の舞となっています。登場人物は、品陀和気命(応神天皇)と住吉三神と呼ばれる底筒男命、中筒男命、表筒男命と言われています。舞手は増えますが、舞い方・舎文などは表舞と同じです。

小山の神(こやまのかみ)

小山の神は、山の神舞を道化したものとも言います。表舞の山の神は、厳しく威厳のある神を演じますが、小山の神では白色の風変わりな道化面をつけます。この神は、大山祇命の子・国狭槌命と言われています。前半の厳格そうな舞から、後半は太刀がなかなか抜けなかつたりして、道化に転じる変化に面白みがあります。観客がすぐ近くにいる座敷などで演ずる場合は、見ている人と一体となって盛り上がるという楽しみもある演目です。

岩戸開本式(本開き)

岩戸開の裏舞として「岩戸開本式」があります。表舞と同じストーリーですが、天鈿女命が岩戸の前で両手に笹を持って踊る巫女舞が加わり、天照大神も岳神楽では天思兼命を従えて幕裏に座ったままでクズシ舞を見ているなどの違いがあります。大償神楽では「稲田姫」を「岩戸開」の裏舞とすることがあります。

神舞

天降り(あまくだり)・天孫降臨(てんそんこうりん)

天孫・瓊瓊杵命は、天照大神から豊葦原の中津国(日本)を治めるように言われ、天鈿女命、天忍穗耳命、天櫛津命を供として、日向の国・高千穂の峰に天降りをします。この舞は、豊葦原の中津国から一行をお迎えに向かう猿田彦命と、瓊瓊杵命の使者との出会いを舞い納めたものです。舞の前半は、赤い天狗面の猿田彦命の勇壮なネリがあり、後半は面を外して四人のクズシ舞となります。





水神の舞(すいじんのまい)

日本六十余州の竜神の総王である屏風ヶ岡の大王は、川や清水が神の氏子(人間)の手で穢されるのを怒り、多数の眷属を集めて、神の氏子に祟りをなさんとしました。これを知った天照大神は、全国の雨水を閉じたため、大小の河川・滝の水が絶えてしまいました。困った竜王は、天照大神に許しを請い、経津主命は竜王に神の氏子を守ることを誓わせ、水を司る大水神の位を授けたというお話です。



天熊人五穀(あまくまびとごこく)・男五穀(おとごこく)

天照大神は、豊葦原の中津国に、保食神がいると聞き、月読命を遣わしました。保食神は、口からたくさんのごちそうを出して歓待しますが、月読命は汚らわしいと怒り、保食神を殺してしまいます。天照大神は、驚いて天熊人命を遣わすと、そこには体のあちこちから五穀が生えた保食神の死体がありました。この舞は、天熊人命が五穀を天照大神に献上するため、天布刀玉命に託す場面で終わります。



悪神退治(あくじんだいじ)

天孫瓊杵命は、豊葦原の中津国に降臨しようとしてますが、悪神悪鬼が国土を悩ましていたため、天穂日命を遣わしますが、三年経っても戻って来ません。次に天若彦命と三熊大神を遣わしますが、やはり戻って来ないため、勇猛な武甕槌命と経津主命を遣わして、ついに悪神悪鬼を追い払ったという物語です。岳神楽では武甕槌命と経津主命の二神と悪神との戦いの舞ですが、大償神楽では七神が登場する豪華な神舞です。



天照五穀(あまてらすごこく)・女五穀(おんなごこく)

天照五穀は、「天熊人五穀」の続編で、天熊人命から五穀を受け取った天布刀玉命が、天照大神に御手渡しになる場面を演じています。五穀を献上された天照大神は、大いに喜び、これを人々の食料となす事を決め、天狭田彦命と天長田彦命に命じて、田や畑に植えさせました。これが農業の始まりであり、保食神は稲荷大明神として五穀を守護する神に祀られたというお話です。



牛頭天王(ごずてんのう)・天王舞(てんのうまい)

牛頭を頂く天王は、竜王の娘乙姫をもらうために南海へと向かう途中、金持ちの巨旦に一夜の宿を乞いますが、強欲で悪行の多い巨旦はこれを断ります。一方、兄の蘇民将来は貧乏でしたが、天王に心を尽くしたもてなしをしたのです。天王は無事に南海へと渡り、乙姫との間に八王子(八将神)をもうけました。その後、天王は南海からの帰りに巨旦を滅ぼし、蘇民には疫病除けの呪法を授けたというお話です。



三韓(さんかん)

応神天皇の母君である神宮皇后は、住吉大神のご神託により、身重のお体ながら武内宿禰を総大将として三韓(新羅・高麗・百済)に遠征することになりました。武内宿禰は遠征の途中、跡部磯蝦に命じて竜宮より潮満珠と潮干珠を借り、この玉を使って見事に三韓を平定します。この舞は、神宮皇后の優雅な四方鎮めの舞で始まり、一転して武内宿禰と三韓王との激しい戦いの場面が変わるところが見所となっています。



恵比寿舞(えびすまい)

丹後の国与謝郡、葵の浦の蛭子命が、天照大神に大漁の場所をお尋ねしたところ、渚の浦に向かえと託宣されました。渚の浦は託宣の通りの大漁であったために、蛭子命は海の幸を揃えて、天照大神に献上しました。天照大神は、大いに喜んで蛭子命に「恵比寿」として漁の守護神となるよう申しつけたというお話です。大漁祈願、五穀豊穡の舞ですが、恵比寿は商売繁昌の神様としても有名です。



尊揃(もろぞろい)・六月舞永無月(みなぎ)・四神尊舞(よじんぐものまい)

この舞は、岳神楽では「尊揃」・「六月舞」、大償神楽では「水無月」・「四神尊舞」などと呼ばれます。水無月は陰暦の六月のことで、祇園の祭りが行われる月でもあります。祇園祭の日に、高天原の神々が天照大神のもとに神集い、天孫・瓊瓊杵命の国譲りの大儀や、三種の神器が伝わる由来を語り、天下太平、豊穡の世になったことを祝って、御神楽を奏して天照大神をお慰めするというものです。

女舞

潮汲・汐汲・塩汲（しおくみ）

神楽能と呼ばれる分野の舞曲です。この舞は、潮を汲む様子を優雅に舞い納めたもので、能の「松風」のロング（役と地謡、または役と役が問答のように交互に謡うこと）の部分の独立させたものと言われています。ただし、能から取り入れた舞であるのか、逆に能大成以前の古い脈を引く舞なのかはわかっていません。「月は一つ、影は二つ、満潮の夜のくるまに月をのせて」と謡う詞章は詩情にあふれ、美しい舞曲となっています。



五大竜王・五躰龍王（ごだいりゅうおう）

帝釈天には四人の王子と一人の姫がいました。帝釈天は一年三百六十五日を四季毎に王子に分配し、姫には三つの神宝を与えました。しかし、暦の分配に漏れた姫は、これを不満として兵を挙げたのです。帝釈天は、門前という者を使者にたて、王子たちに四季の末の十八日ずつを姫に譲るように申し渡ししました。これにより、姫に与えられた四季の末の十八日は「土用」と定められたというお話です。



竜宮渡り（りゅうぐうわたり）・安産舞（あんざんまい）

海幸彦（火闌降命）、山幸彦（彦火々出見命）の兄弟は、ある日、お互いの猟具を交換し、山幸彦は海へ行きましたが、魚に大事な釣針を取られてしまいます。そこに塩土翁が通りかかり、竜宮に渡って竜神に頼めばよいと教えます。山幸彦は、海の化生の物どもを退治して竜宮へたどり着き、無事に釣針を探し出し、竜神の娘豊玉姫命と結婚します。のちに、豊玉姫命は、子宝に恵まれ安産の神となったというお話です。



機織（はたおり）

昔、若狹の国に仲睦まじい夫婦がおりました。ある時、夫は京の都へ上って帰らず、その間に妻の機織りの女郎に心寄せる里の長者は、悪人に頼んで夫の良からぬ噂を流したのです。女郎はそれを聞き、耐えかねて池に身を投じますが、成仏できずに亡霊となり、機織歌にあわせて狂ったように機を織るのでした。京から帰ってきた夫は事の次第を知り、出家して妻を手厚く供養したという物語です。





年寿(ねんじゆ)

難波が浦に、日頃から信心深い老夫婦がおり、薬師大明神の御利益により長寿を得るといってお話です。老夫婦は、年を重ねても幸せな日々を送れるのは、神仏のお陰であると感じ、日頃からお参りを欠かしません。そして、三十三度の諸事大願の日、老夫婦の前に女神が現れ、「八十余りの老翁は三十ばかりに、七十余りの女老は二十ばかりにいたしましたしよ」と、二人を若返らせたのです。



鐘巻・金巻(かねまき)・道場寺(どうじょうじ)

一人の娘が女人禁制の霊場である鐘巻寺へ参拝したいと申し出ますが、別当はこの寺には五つの不思議や七つの不思議があるので女の参拝はできないと断り、さらに娘が鐘の緒を取ると蛇身になると忠告します。しかし、あきらめきれない娘は、ついに寺に参拝して鐘の緒を取り、蛇身へと変わり果ててしまいます。これを知った旅の客僧(山伏)は、この蛇身と戦い、法力によって折伏させるのです。



苧環(おだまき)

苧環とは、麻糸を巻いて中空の玉にしたものです。あるところで大変美しい娘がおり、娘のもとには夜な夜な密かに通う若者がいました。この若者は夜中に通って、昼には姿を見せません。不思議に思った娘は、苧環から糸を出して針に付け、若者の着物の裾に刺しておきました。娘がその糸をたどってゆくと、そこには化生の物(大蛇)となった若者がおり、娘は大変に嘆き悲しんだというお話です。



根子切り(ねこぎり)・蕨折り(わらびおり)

富士の麓に、年老いた両親と美しい娘がいました。娘は両親の願いで、蕨を採りに川を渡って南の山へ向かいましたが、帰りに風雨で川が増水し、渡るこゝとができなくなりました。娘は老船頭に、願い事は何でも叶えますと嘘を言い、無事に川を渡ります。一日一夜の暇をもらい娘は家に帰りますが、待てど暮らせど娘は戻らず、老船頭は悔しさのあまり、蛇身となって人間を襲うようになるのです。

荒舞

勢剣勢津留伎(せつるぎ)・手剣(てつるぎ)

この舞は、別名「三人くぐりっこ」とも呼ばれ、三柱の神々による悪神悪鬼退散、除災呪法の舞ではないかと言われています。しかし、詞章がないため、どのような場面を表しているのかはよく分かっていません。最初は荒面の三人の舞手が激しく舞い、面を外してからのクズシ舞では、お互いの剣を持ちながら円を描いてくぐり抜けるという、スリルがあつて大変面白い演目です。



天女(てんによ)

祇園ぎんの祭の前夜、神々が集まって楽器を演奏し、舞い、神遊びをしている様を舞い表すものです。この時に、舞の当番になったのは若くて美しく舞の上質な女神であったことから、神々が大いに喜んだという内容です。中世の白拍子の舞振りが入っていると云われ、美しく優雅な舞となっています。この女神は、岳神楽では天細女命あめつひめのみこと、大償神楽では諏訪の神女かみづなと言われています。



橋掛・橋架(はしかけ)

近江おみの国の名取川は川幅が広く深いため、橋を架けられませんでした。そこで、川上にあるご神木のうち、最も大きな二十日杉はつかすぎを切って橋の釣木つりぎにしようと考えました。ところが、この杉は宵に切れば朝には生え、朝に切れば宵に生え、ようやく七日七夜かかって切り倒したものの、全く動きません。そこで、神子のご託宣たくせんにより、お鶴御前の御手掛けをお願いし、無事に橋架けを成就させたというお話です。



笹分(ささわけ)・笹割の舞(ささわりのまい)

「湯立て」の神事に由来する舞と考えられます。湯立てとは、大釜に笹の葉を浸し、そのしぶきを浴びて、災難や病魔を退散させるという神事です。登場する神は「家宅六神」という住宅・居地の守護神で、もとは新築や建替えなどの修祓しゅうはらに舞われたものとも考えられます。三人舞で、激しい四方鎮めを行い、笹を手草てぐさとして罪汚れを払い、剣を取って悪神悪鬼を払う祈禱舞です。





注連縄を切る所作については、天照大神が天の岩屋を出るときに、張つてある注連縄を切つてお迎えしたことに由来するとも、注連縄を張り神座で神楽を奉じた終わりに、神域と人間界との境を取り払い元通りにする舞とも言われています。そのため、神楽ではこの舞の後には権現舞しか舞う演目はないとも言います。大償神楽では真剣を抜いて注連縄を切り落とし、岳神楽では刀で切る所作のみを行います。

注連切(しめきり)



荒舞の中でも最も激しい演目で、高天原の荒神が、四方鎮護、七難即滅、悪神悪鬼を退散させる様を舞つたものと言われ、この荒神は勇猛な武甕槌命とか、天尾羽張命とも言われますが、詞章がないため確かなことは分かっていません。お囃しと舞手の動きがびたりと決まる場面が何カ所もあり、見事に決まったときには、観客の掛け声や拍手が場を盛り上げる人気の演目です。

諷誦(ふうしよう)・普将(ふしよう)



京都の鞍馬寺で、日本の天狗たちから剣術の手ほどきを受けた牛若丸(のちの源義経)のところへ、唐の天狗の首領善界坊(ぜんかいぼう)・甚海坊(じんかいぼう)が兵法比べにやっけて来ます。善界坊は大きな鉄棒をびゅんびゅんと振り回し、牛若丸に打ち掛かりますが、牛若丸は「差合」「浮舟」「白波」「飛竜」「臥竜」などの秘術をつくして戦い、ついに善界坊は降参して唐へ逃げ帰るといふ舞です。

鞍馬(くらま)・鞍馬天狗(くらまてんぐ)

番楽舞



この舞は、天鳥船命と武甕槌命が出雲国伊那佐の小浜に天降りし、豊葦原の中津国の悪しき神々を鎮め、大己貴命(大國主命)に国譲りの大儀を勧めたという神話に基づく舞であるとか、また、竜王にまつわる舞ではないかとも言われます。阿吽の二荒神による激しい四方鎮めや踏み足があり、面を外してのクスシ舞では、お互いの太刀を持つてのくぐり抜けが見所で、「二人くぐりっこ」とも呼ばれます。

龍殿・竜天(りゅうてん)

屋島(やしま)

この舞は、客僧が屋島に宿を取り、宿の翁から源平の屋島・壇ノ浦の合戦の様子を聞き、それが夢枕に現れるという筋書きです。平家の悪七兵衛景清が、源氏の武者相手に大暴れをします。それを見た義経が駆け寄ろうとしたところへ、弓の名手である平家の大将平教経が矢を放ちます。これにより義経の従臣佐藤繼信は義経の楯となって討ち死にし、平家方も教経の従者菊丸が討たれてしまうのです。



木曾舞(きぞまい)

木曾義仲は、平家を京から追放する手柄を立てますが、のちに源頼朝の軍勢に攻められます。義仲軍と頼朝軍は宇治川で激突し、近江国粟津の戦いでついに義仲は討ちとられてしまいました。この舞は、義仲の妻とも言われる巴御前が、偶然会った木曾の旅僧に、これらの戦いの様子を語り、共に戦った葵・山吹の姉妹の甲いを頼み、再び戦場へと向かっていく勇姿を舞っています。



その他の舞

(写真を掲載していない舞です)

悪魔退治(あくまたいじ) ※「神舞」

神武天皇の東征神話を基にした神舞です。神武天皇は、日向の高千穂から、豊葦原の中津国の都としてふさわしい土地を探し、三種の神器を奉じて東へ向かいます。大和へ入ろうとした神武天皇の一行の前に、長髓彦が立ちふさがり苦戦を強いられますが、道臣命らの活躍により無事平定し、神武天皇は橿原の宮で即位をしたという物語です。舞は、剣の威徳を表し、悪霊悪鬼を鎮める祈禱の舞です。

三神の舞(さんじんのまい) ※「荒舞」

大償神楽のみに伝わる舞です。最初は勢剣(手剣)の舞と同様に荒神面を付けた三人が激しい鎮めを行い、後半は面を外して素面となり、互いの太刀を持って巧みにくぐり抜ける「くぐりっこ」となります。他の荒舞と同じく詞章が伝わっていないため、どのような神々の舞であるかはよく分かっていません。

曾我(そが)・曾我兄弟

※「番楽舞」

建久四年、源頼朝が富士の裾野で大規模な巻狩りを催しました。これには関八州の武将がこぞって参加をし、その中に、所領争いのもとで工藤祐経に討たれた河津三郎祐泰の遺児、曾我十郎祐成・五郎時致の兄弟が紛れ込

んでいたのです。兄弟は、この巻狩りの最後の夜に、祐経の陣屋に討ち入って見事に仇を討ちますが、兄は仁田四郎忠常に討たれ、弟は頼朝の館に押し入って捕らえられ首をはねられてしまうというお話で、日本三大仇討ちの一つです。

おんだい舞 ※「祈禱舞」

大己貴命(大国主命)は、国造りの神であり、農業神・商業神・医療の神としても信仰されています。この舞は、住地居宅のための地鎮の舞とも、馬屋繁盛の舞とも言われ、藁で作った雌雄の小さな馬にまたがって、これを先頭に立て、楽屋も胴前も総動員で行うものです。人手が足りないときには、観客まで巻き込んで、家中の部屋を行列して歩くという一風変わった舞です。

折敷舞(おしきまい)・膳舞(ぜんまい)

折敷とは、神事や儀式などに使われるお膳やお盆のことであり、これらを手に持って曲芸的に舞う演目です。神への供物をのせた折敷は、神前に供するまでは、たとえつまずいても転んでも、絶対に落としたりしてはいけません。その慎重な取り扱いの気持ちに表したのがこの舞だと言われています。そのため、お膳やお盆を手のひらにのせて回したり、でんぐり返しをしても落とさないことをアピールする演目なのです。

狂言

(一部のみを紹介します)

田植え(たうえ)

旦那様の家に田植えの手伝いに行った平左工門一家が巻き起こす珍騒動です。平左工門が若いお松という女にちよつかいを出したため、アツパ(妻)がやきもちをやいてお松と悶着となり、今度は平左工門が仲裁するというお話です。平左工門のジサマ(爺様)やバサマ(婆様)も登場して楽しく賑やかに繰り広げ、最後には、田の神様に差し上げる「よしこの」という優雅な手踊りで舞い納めます。



猿引き(さるひき)

猿回しをしながら諸国を旅していた浪人と、女房連れの座頭の坊が出会います。座頭は、浪人を杖でたたいたり、傍若無人の行動をし、女房を呼び寄せて酒盛りをはじめます。そのうちに、浪人と女房は仲良くなり、浪人は自分の連れていた猿を座頭の腰に結わえ、座頭の女房の手をとって逃げてしまいます。最後は、体をあちこち触られて怒った猿と座頭との追いかけ合いで終わります。



馬鹿婿(ばかむこ)

三郎兵衛は、主人から婿捜しを頼まれ、少し抜けた朋友を紹介しします。朋友はとんちんかんな男でしたが、大黒舞を舞うと主人はこれは福の神様だと喜んだのです。

箱根番所(はこねばんしょ)

箱根番所の芸事好きな役人は、通行人が何か芸をすれば通行を許すと申しつけます。通行人が芸を披露するたびに、面白く言っている物を与え、役人も一緒に踊り出し、ついには帯を解いて男根を振り回して幕入りします。

舅見参(しゅうとけんざん)

嫁をもらって十年目にしてようやく舅に会いにやってきました。婿殿は、とんでもない男で、人の話を勘違いしてとんちんかんな問答を繰り広げます。さすがの舅も最後はあきれかえって許してしまうという狂言です。

狐とり(きつねとり)

マタギの八造は、狐を捕りに信田ヶ森にやってきました。狐が化した女が現れると、八造は女に迫ったりしますが、最後は、棒の先につけた油鼠という道具に誘われて、狐はついに正体を現し、八造との追いかっこをして幕入りします。

権現舞

権現舞(ごんげんまい)

権現舞は、神楽の最後を締めくくる舞です。権現様が激しく行う「歯打ち」は悪魔退散、また、権現様の胎内くぐりをして嘔んでもらう「身固め」は、無病息災に御利益があると言われています。民家であれば、炬端や台所など、火を使う場所で行う「火伏」の儀式は、とくに霊験あらたかであるとされています。このほか、権現舞には「しとげ獅子」「這い獅子」「くり獅子」など、家の新築やお祝い事に舞われる演目もあります。



神楽鑑賞 マニュアル

神楽を見に行こう！

さあ、神楽を見に行くぞ！……ところで、持ち物は？ マナーは？
ここでは神楽鑑賞の準備や心構えについてお話しします。

● 持ち物は？

神楽は、屋内・屋外に限らず、何時間もじっと見ているとシンシンと冷えてくることが多いのです。そのため、小座布団・膝掛け・使い捨てカイロ・コート・マフラー・手袋等の防寒具を持って行くと、とても役に立ちます。また、屋内での鑑賞には靴などを入れるビニール袋は必須です（よく靴を間違われる）。夏場に多い屋外での神楽には、虫除けスプレーや塗薬・帽子・座るための防水シート・折りたたみ椅子、そして暗くなった時のために懐中電灯などがあると便利です。

季節を問わず持っている役立つものとして、飲物・食物・筆記用具・カメラ等があります。神楽は大抵二時間以上演じますので、喉の渇きを潤すお茶類、小腹を満たす飴やスナックがあると、最後まで落ち着いてじっくり見られます。また、知り合いが出来た時のために、名刺なども持っている役立つことがあります。

なお、演目のパンフレット等は、当日会場で配布される場合もありますが、神社のお祭りでは配布されないこ

との方が多いため、解説書などを持って行くと、より一層神楽を楽しむことができます。

● 駐車マナーを守ろう！

神楽は、神社の神楽殿や公民館、体育館、イベント会場など様々な場所で演じられます。広い駐車場をもつイベント会場などでは問題ありませんが、神社や公民館などは駐車場が狭いところがほとんどで、付近の空き地や路上駐車になる場合があります。交通の妨げや違法駐車にならないよう十分に注意してください。

● 前で鑑賞しよう！

お祭りなどの神楽は大抵、全席自由。というよりも席というものはなく、観客それぞれが自分の好きな所に、適当に場所をとって見ます。神楽の本当の良さを知るには、なるべく前で見て、全身で神楽を体感することが一番です。神社の神楽殿で鑑賞する場合は、神楽殿そのもののがかなり高くなっているため、舞台から少しだけ離れ

たところに座ると足先まで見えて、じっくりゆっくり見られるでしょう。神楽は、少し見上げるぐらいの角度が一番迫力あるように思えます。

● 撮影は注意しよう！

カメラやビデオなどを持って行くときは、その会場が撮影禁止になっていないか確認し、周りのお客さんに迷惑をかけないように心がけることが大切です。とくに、三脚は場所を取りますので、できるだけ背後に壁や柱がある位置に据えれば、心おきなく撮影できます。当然、予備の電池やバッテリーは必須です。最近は、携帯電話で撮影する人も多くなりました。いつ電話が鳴るか分かりません。通常はマナーモード等にしておきましょう。

● 「御花」はどいつやっつ出すの？

神社のお祭りなどでの神楽鑑賞は基本的に無料で、誰でも自由に見ることが出来ます。ただ、素晴らしい神楽を鑑賞させてもらうお礼の気持ちとして「御花（おはな・みはな）」と言って、のし袋に入れた現金や、お酒などを出す人もいます。平均すると二〜三千元が多いようですが、出したい人は自分の懐と相談して出すのがいいでしょう。また、友人や知人と一緒の場合は、連名で

出すのも良いかもしれませんが。この御花は、お祭りや神楽の保存伝承のために役立っています。

御花は、のし袋の表に「御花」「御初穂」などと書くのが普通です。もちろん「御祝」「寸志」でもかまいません。その下には自分の名前を書きますが、難しい名前の方は読み仮名をふりましょう。なぜなら、「花ぶれ」といって、神楽の途中で御花を出した人の名前が読み上げられるからです。

御花の出し方は、受付がない場合には、直接、楽屋に行って神楽衆に手渡すことがほとんどです。楽屋まで行くことが難しかったり、恥ずかしい場合には、演目の合間を見計らって、舞台で太鼓や鉦を演奏している人の横に置いたりしても良いのです。

● 神楽を楽しもう！

最近では、神楽は神様に奉納する「神聖」なものだからと、静かに食い入るように見ている人が多くなりました。神楽は、確かに厄払いや健康、豊穰などを祈る神事的な要素もありますが、昔から酒肴を伴う庶民の娯楽の場でもあったため、早池峰神楽でも途中で御神酒が回ってきたりすることがあります。お酒を飲んで大騒ぎし、他人に迷惑をかけるのは論外ですが、車の運転もなく、自分が飲める状況の時には、酒肴もいただき、素晴らしい舞を堪能するのも楽しみの一つです。

●拍手をしよう！

演目の終わりに拍手をすることはもちろん、演技中でも「すーい！」「素晴らしい！」と思う気持ちをその場ですぐに伝えるには、拍手が一番です。拍手が多いと神楽衆の気合いも違ってくるそうです。特に激しい舞の場合、一瞬ピタッと舞手とお囃子が止まる「キメ」の場面に拍手が合うと、その場の雰囲気盛り上がりします。また、場を盛り上げるものとして、観客からの掛け声があります。例えば、「キメ」の時、「イヤー！」とか「ヨォッシー！」といった掛け声を絶妙なタイミングで掛けられる観客になれば、立派な神楽通でしょう。

●直会に参加してみよう！

直会とは、神楽が終わった後などに開かれる宴のことです。祭礼などの直会ですと、地元の関係者以外は参加しにくいのですが、神楽の場合は神楽衆と観客との懇親会のような形態となっていますので、比較的気軽に参加することができます。直会では、お酒や料理が無料で振舞われるのですが、神楽の時に「御花」を出していれば、あまり気後れすることなく参加できるでしょう。

神楽関連施設

■大迫郷土文化保存伝習館

花巻市には、永い歴史とともに傳承されてきた神楽が多くあり、そうした神楽を次の世代に伝えることと、多くの人々が体験できるように、昭和五十六年岳神楽の伝わる早池峰神社近くに建てられました。館内には、神楽を練習するホールと、神楽の道具や衣装、そして早池峰大権現を祀る岳妙泉寺関係の貴重な資料が展示されています。

■神楽の館

神楽の館は、明治時代の民家を移築し、神楽の練習・公開に活用しています。この建物は南部曲屋まがらでしたが、移築にあたって建築当初の直屋すぢやの形に戻しました。大償神楽が傳承されている地域にあり、昔懐かしい民家での神楽を楽しむことができます。大償神楽の舞初め・春の舞・大償神社例大祭の奉納神楽・舞納めなどが公開されます。

【所在地】
岩手県花巻市大迫町内川目39-37-2
【見学等】
外観見学は自由。

【開館期間】 5月1日～10月31日
9:30～16:30
【休館日】 毎週月曜日(冬期11月～4月休館)
【入館料】 大人210円、中高生100円、
小学生50円
【所在地】 岩手県花巻市大迫町内川目1-2
☎0198-48-5864

神楽ごぼれ話

◆御利益に預かる

神楽には、権現舞の「身固め」や「火伏」の御祈禱のほかにも御利益があるとされる舞や風習があります。覚えておくことあなたも御利益に預かれるかもしれません。
〔袖下ろし〕舞手の方に、娘さんの新しい振袖などを着て踊ってもらうことを「袖下ろし」と言います。これは、娘さんの無病息災や招福を祈るものです。

〔サンノ神〕山の神舞では、お盆に盛られた米などを四方に撒きます。その米を食べると無病息災、身に付けていると護符代わりになるなどと言われています。また、山の神舞の前に、妊娠中の女性の腹帯を渡しておくこと、それを締めて舞ってくれます。山の神は「サン(産)の神」とも読め、安産の祈願になると信じられています。

◆神楽衆の宿に泊まる

早池峰登山や早池峰神社例大祭を鑑賞するなら「神楽の里」に泊まってみませんか。早池峰山の登山口に向かう途中の岳集落は、江戸時代には「岳六坊」と呼ばれた修験山伏たちの宿坊がありました。現在も何軒かが民宿を経営しており、宿坊の名残は「大和坊」「日向坊」「和泉坊」などの名前からもわかります。この岳集落の人たちが舞い伝えているのが岳神楽です。民宿の方々は何らかの形で神楽にかかわっていますので、神楽談義に花を咲かせながら、季節の山の幸をふんだんに取り入れた料理を堪能してはいかがでしょうか。

【神楽暦】

●大償神楽舞初め	1月2日	神楽の館
●岳神楽舞初め	1月3日	早池峰神社参集殿
●大償神楽春の舞	4月下旬	神楽の館
●早池峰神社例大祭宵宮	7月31日	早池峰神社神楽殿
●早池峰神社例大祭	8月1日	早池峰神社神楽殿
●大償神社例大祭	9月中旬	神楽の館
●大償神楽舞納め	12月第3日曜日	神楽の館
●岳神楽舞納め	12月17日	早池峰神社参集殿

【神楽の日】

毎月第2日曜日は、「神楽の日」として、花巻市大迫町の岳神楽・大償神楽・八木巻神楽が月交代で演じます。(ただし、12月、1月は除く)

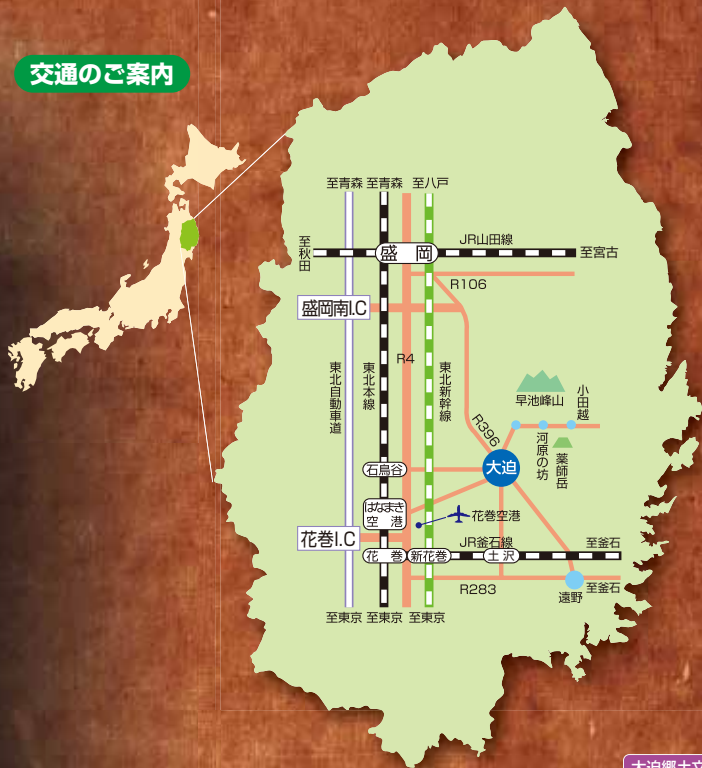
【会場】大迫交流活性化センター(早池峰ホール)、岩手県花巻市大迫町大迫3-161
【入場券】前売り800円、当日1,000円
【問い合わせ】大迫神楽の日実行委員会(花巻市大迫総合支所内) ☎0198-48-2111

【神楽の情報】

早池峰神楽の最新情報については、花巻市のホームページを御覧下さい。

<http://www.city.hanamaki.iwate.jp>

交通のご案内



【発行】花巻市観光課

平成22年3月現在のものです。